

戦後民選された北海道の初代知事は、それまで道の土木係長を務めていた弱冠三十五歳の田中敏文氏だった。

一九四七年（昭和二十二年）に初当選したころは、「五階級特進」成り上がり者「青二才」と陰口をたたかれ続けた。多くの先輩部長や課長たちからもそっぽを向かれ、苦労したという。

営林区署の主任時代、「大東亜戦記念植樹」と称してはやし始めたちよび髭に、イガグリ頭。道政記者クラブの古参記者の中には知事をつまえて「オイ、田中くん」と、あえてぞんざいに呼び付ける者までいたらしい。

四七年七月、初めての道議会での道政執行方針演説に臨んだ田中氏は「わたくしは常に自己の若年なることを忘却せず、絶えず自己をむなうして」と、低姿勢を強調。「宴会行政はやらない」「自動車は乗らない」と宣言し、移動用のスクーターも買った。ところが、庁内や道議会の荒波にもまれるうちに、スクーターをやめ、最高級車のキャデラックに乗るようになり、髪を伸ばし始めた。「明朗な人当たりの良さは姿をかくし、用心深い一歩下がって人に接するどこか暗いイメージ」（人脈北海道・赤レンガ編）北海道新聞社）が生まれてきたという。

進駐軍との折衝、レッドパージ、道土木部を分離されたの開発局新設など、難題を乗り越えていく中での「変身」。アンチ田中を一掃するため、副知事以下九十人余りの幹部を更迭する人事もやっつてのけた。若

「執念」の強さと危うさ

さを揶揄され続けながらも、最終的には三期十二年をまっとうした、したたかな青年知事の胸のうちに去来していたのは、どんな思いだったろう。

安倍晋三首相も二〇〇六年、「戦後最年少」で首相に就任した。田中角栄氏の五十四歳を抜く五十二歳での首相就任だった。

ポスト小泉の最右翼として期待され、自民党幹事長、官房長官など帝王学を学ぶためのキャリアを重ねていたが、まだ当選五回、閣僚経験が一回しかないという不安もあった。

案の定、「お友だち内閣」「官邸崩壊」「カメラ目線が不自然」などと軽侮された。象徴的に映ったのは、当時の中川秀直幹事長が「閣議で」首相が入室しても起立できない、私語を慎めない政治家は内閣にふさわしくない」と閣僚に首相への忠誠心を求めた発言。安倍首相に重みがないことをかえって浮き彫りにしてしまった。

六年前の安倍氏が田中元知事と違ったのは、政権運営の中で学習した成果を生かせないうちに幕引きしてしまったことだ。体調不良もあって突然の辞任。失意の毎日を送ることになる。

その間、「あの時こうしておけば」と、首相在任時を振り返る反省ノートを書き記し、読み返しては悔しさを反すうしていたという。まさに怨念を忘れまいと、石に刻み込むような話だ。そして昨年十二月、まさかの首相復帰を果たす。

安定している。最近の世論調査では、内閣支持率が七一%（読売新聞）に達し、異例ながら発足直後の六五%から二回連続で上昇した。フェイスブックの活用や、アルジェリア人質事件の際、政府専用機内で首相自ら指示する様子の写真を積極的に公開するなど、世論対策も怠りない。

前回の第一次安倍内閣以降、歴代首相はほぼ一年ずつで交代する悪循環に入った。安倍氏も政権を投げ出すような辞め方だっただけに、再チャレンジなどあり得ないと思われたが、失敗の経験を生かし、初心者にはない熟達した政権運営ができるなら悪くない。攻守とくろを交えることで与野党が刺激し合う政権交代の意義とも言えるだろう。

ただ、甚だしく念がこもった政権復帰だけに、見た目の巧みさのみに幻惑されてはならない。新聞によると、霞が関には「首相は四十二キロ余りのマラソンを、一〇〇メートル走の勢いで走っている」との評があるという。

金融緩和、積極財政によるアベノミクスなどの華々しい経済政策の影で、一括交付金が廃止されて「ひも付き補助金」が復活したり、国の出先機関改革が止まったりするなど、関心が薄いとみられる自治・分権政策は逆流している。そして今は表に見せない憲法改正や安全保障改革など「戦後レジェームからの脱却」への激しい思い。

臥薪嘗胆の日々に首相が何を思ってきたのか。その執念の強さと危うさを、しっかりと注視しなければならない。

八由V